



2022.10.15

No.231

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間2,000円)

## 「国葬」は大日本帝国の遺物



10.2富良野市「鳥沼」の紅葉 撮影・樋口みな子

近所の木々が色づき、一気に秋が深まりました。各地の豪雨被害にも気候変動の怖さを実感しました。被害に遭われた方たちに心からお見舞い申し上げます。

国民の6割以上が安倍晋三元総理の国葬に反対していたのにも関わらず、強行されました。国家をあげての葬儀に16億円も使ったことは許せません。遺骨を見送る弔銃にも違和感を覚えました。「国葬反対」と私もデモに参加したかったのですが、家族の介護があり行けませんでした。

前号で反対する理由を書きましたのでメディアで取り上げた記事を転記します。読者のMさんがまとめた一部です。

「『国葬』田中優子の江戸から見ると」 毎日新聞2022.8.31夕刊

江戸時代でも権力者の死を権力の安定に利用したが、国葬というものはなかった。国葬は近代の産物である。国葬の数少ない研究者である宮間純一氏の著書「国葬の成立—明治国家と『功臣』の死」によると、国葬は天皇の特旨(特別なおぼしめし)によって行われた、大日本帝国の遺物である。政治家は天皇の臣つまり家来であったから、天皇が功臣の死を追悼し、それを媒介にして第三者にも哀悼を共有させようとしたのだという。／国葬令は1926年に法制化された。その法制化も、天皇が発する法令である「勅令」の文章化によってなされた。皇族以外の者の国葬が行わ

れる日には、天皇は執務につかず、国民は喪に服すことが定められた。国葬とはそれほど重い意味もっていたのだ。このように天皇の意思によってなされたものであったことから、敗戦後の47年に、国葬令は失効した。／失効以前の43年に行われた山本五十六の国葬は戦争に利用された。「元帥につづけ」というスローガンが掲げられ、国葬を使って戦時体制の強化が図られたのである。その事実から宮間氏は「大日本帝国の国葬はナショナリズムを高揚させる機能を持ち、最終的に国民を戦争に動員するための装置とすられた儀式である」と断言する。

辺見庸(作家)ツイッター 抜粋

★2022/8/29◎たぶん相当おかしくなっている。悪(乱)気流が漂っている。危ない。安倍の家族葬に自衛隊特別儀仗隊を動員したり、不法な「国葬」に皇室を利用したり。臣民と信徒がごっちゃにされたり。これはどう考えてもファシズムではないか。丸山眞男『忠誠と反逆』を読む。◎「閣議決定を憲法より上位に置く倒錯」と東京新聞労組が批判しているが、まったくその通り。この倒錯こそが憲法違反なのであり今日の狂気なのだ。「安倍国葬」は本質上、憲法違反なのであり中止しなければならない。★8/30◎弁舌さわやかでなくていい。鈍臭くへドモドしながら差し当たり「真実」と信じられることを、衆をたのまず独りでモゴモゴと語りつづけること。通説だけでなく自説も疑うこと。絶えず疑いつづけること。「大衆」から離脱し「個」になること。学び語りつづけること。妥協しないこと。その上で「国葬」反対。◎安倍晋三は統一教会の広告塔だったから悪いというだけにとどまらない。現行憲法下でも戦術核を保有できると公言した、とんでもないアタオカ好戦分子なのである。忘れてはならない。★9/1◎けふ、大震災・コリアン虐殺記念日。忘れまい。★9/2◎歴史の実時間に物事を公正に判断するのがいかに難いか。芥川龍之介だって関東大震災の初期には朝鮮人を疑っていたふしがある。[略] 当時10歳にもみたなかった丸山眞男少年の眼のほうを冴えていた。聞いてはいたが「恐るべき大震災大火災の思出」には眼をみはる。「朝せん人」に暴行を加えるような自警団は「なくなさせた方がよい」とはっきり書いている。 2pに続く

★9/5 ◎[小池都知事 今年も大震災時の朝鮮人虐殺犠牲者への追悼文送付を拒否。6年連続] 大体、あの威張りくさった都知事は関東大震災における朝鮮人虐殺に無知で、一顧だにしない。といふか、意図的に無視している。非礼である。歴史修正主義者の臭いあり。はやめろ。★9/8 ◎やはり安倍晋三「国葬」はやってはいけない。中止すべきだ。強行すれば将来にわたり禍根を残すだろう。安倍政治はこの国を暗黒に導いたのだから。◎仮に「善政」であったとしても「国葬」はおかしいとするのが、最低限の知性だ。国家はいかなる形にせよ、屹立させてはならない。◎安倍政治の病性はいくらでもあるが、ひとつ挙げるとすれば、個人の内心を侵し容喙しようとしたことだ。即ち、内面の支配、統制が可能と考えたこと。★9/13 ◎27日は事実上の首都戒厳令だ。生きて諸悪をもたらす死してなお臣民に多大の負担をかける、安倍よあんたはつくづく疫病神だ。国民の半数以上が反対する「国葬」に外国賓客を受け入れる必要はない。事情を説明してお引取り願え。今からでも遅くはない「国葬」中止、安倍の「犯罪を偲ぶ会」に切り替えよ。(まとめ・M.Mさん)

## 竹久夢二の人としての温かさに感動

東川の画廊「アートギャラリー ルージュ」を訪ねて



読者である友人が、「取材もあるので、東川に行けるよ」と誘ってください、10月2日実現した旅

です。(写真は山地克紀さんとアートギャラリー ルージュの前で)

のびやかに広がる富良野の丘で深呼吸して東川に向かいました。竹久夢二の知られざる貴重な絵が東川で展示されているという記事を読み、「是非行って絵を観たい」と思いました。

第2次世界大戦の時、ユダヤ人を救った日本人と言えば外交官の杉原千畝が有名です。ナチス・ドイツに迫害されていた多くのユダヤ人にビザを発行して亡命を助めました。でも、画家の夢二もそんな一人であったことは殆ど知られていません。美人画で有名ですが、1930年代にドイツに渡りユダヤ人に絵を教える傍ら彼らの国外亡命を助めました。

「アートギャラリー ルージュ」名前の通り、真っ赤な建物です。でもなかなか見つかりませんでした。私は朝日道内版におおきく掲載された記事を持っていったので、近くでギャラリーを開いた山地克紀さんに電話しました。共同運営者の妻富美子さんが、近くまで出て迎えていただきました。

小さなギャラリーには、たくさんの絵が飾られていました。ご夫婦の絵を観る力を存分に感じるいい絵がたくさんありました。

何とんでもなくても圧巻は竹久夢二がユダヤ人女性をモデルに、黄色の和服で羽根つきをさせた躍動感のある絵です。長く行方が分からなかった絵を買ったのが山地さんでした。鑑定書も見せていただきました。記事にもありましたが「夢二は大逆事件で幸徳秋水に同情を寄せ、ベルリンでは、ユダヤ人迫害に怒り、ユダヤ人の生徒たちを大事にして熱意をもって教えた」と語っています。そんな夢二の生き方にも共感された山地さんも素晴らしいです。ギャラリーには30点近くの夢二の作品が展示されています。紙面の都合で紹介しきれませんがミュシャの作品に出会えたのも嬉しかったです。チェコに行ったときに聖ヴィート大聖堂でミュシャの素晴らしいステンドグラスを観ました。シャガールやロートレック、バンクシー、田辺三重松などの作品も展示しています。問い合わせは0166・82・2517 または090-7645-4502 へ。(みな子)

## 湧き水でニジマスが泳ぐ鳥沼



東川の画廊に行く前に立ち寄ったのが富良野市の郊外にある鳥沼公園です。

鳥沼はとても透明度が高くて美しいのですが、この水は湧き水と聞いて感動！光が当たるとその透明度がわかりますね。木々に囲まれている鳥沼は水面がおだやかなため、空が映り込みます。(一面の写真)ハンノキやミズナラの森でどんぐりがたくさん落ちていました。

沼では30センチもあるニジマス(上の写真)が悠々と泳いでいました。沼は浅くボートは無料で乗ることができるそうです。時間があつたら鳥沼一周したかったです。

ドラマ『北の国から』のロケ地として使われたこの公園は、植物だけでなく魚や野鳥などたくさんの生物も生息しているとのこと。またいつかゆっくりと訪ねてみたいです。(みな子)



10.2  
秋の紅葉を満喫しました。

# 八重山・石垣島の戦争の苦しさ、悲しさを伝える 『潮平正道さんの原画展』を開いて 溝井留美



沖縄の本土復帰50年の今年、東京北区赤羽の絵本専門店青猫書房のギャラリーにて、「潮平正道が描いた『絵が語る八重山の戦争』原画展」を開かせていただきました。

「絵が語る八重山の戦争 郷土の眼と記憶」(南山舎)は、2020年夏に出版されました。この本を手にしたとき、私は一人でも

多くの人にこの本を知ってもらいたい。八重山を好きになり八重山に通い続ければ続けるほど、島のことを知らない、もっと知らなければならぬと思ってきました。

沖縄戦のことも然り。本土の人たちは実は八重山の戦争のことをほとんど知りません。沖縄戦というと、鉄の暴風をイメージしますが、各々の島での様々な戦争の苦しさ、悲しさがありました。潮平さんのこの本は、八重山石垣のそれを伝えてくれる本だと思いました。

また、潮平正道さんの想いが、娘さん、お孫さんへとつながっていることにも、感銘を受けました。伝えていくことや、つないでいくことは大切だけれども、難しいということもまた日頃感じてきたから。

でも、コロナがひろがって石垣島を訪ねることもままならず、潮平さんに直接、気持ちをお伝えすることもないままに、潮平さんは昨年四月に88歳で亡くなられてしまいました。

潮平さんは不思議な魅力のある人でした。物静かなようで明るく、飄々とユーモアたっぷりに語っているけれども、その言葉に重みがありました。いつも優しい笑顔で穏やかな方なのに、戦争体験を語るとき、平和への思いを語るときには、強い口調で、戦争はいけないとおっしゃっていたこと、その強い眼差しを覚えています。本を手にして、潮平さんの深い心にやっとたどりついたように思いました。

石垣島で生まれ育った潮平さんは、少年兵部隊「鉄血勤皇隊」として石垣島で戦争を体験されました。その当時のことを、絵で描いて表現したものの一部を今回、展示させていただきました。この原画は、実はもともと作品として描かれたものではありません。石垣島で平和学習のガイドとして、30年以上子どもたちに語ってきた潮平さんが、子どもたちに言葉だけでは伝わらないと考え、伝えたいと思って絵で表現しようと描かれたものだったのです。

ボール紙に白い画用紙を貼って、鉛筆で何度も何度も丁寧に重ねて描いてこられた絵は、未完成のようにも見えました。この原画が石垣島を出るのははじめてのことでした。

潮平さんの、大切な、伝えかかった記憶を、今回、石垣島にある南山舎の上江洲儀正さんにつないでいただいて、ご遺族から大切な原画をお借りすることが出来ました。展示させていただく機会を得たこと、本当に感謝しています。

この絵をみたいと、たくさんの方が足を運んでくださったこと、とてもうれしかったです。潮平さんがご家族で暮



らした東京都多摩市の方々や、たくさんの方が潮平さんの懐かしいエピソードをもって、訪ねてくださいました。

潮平さんの人と人をつなぐ優しさを今回の展示

で感じる事が出来ました。潮平さんが、いつも会場で微笑みながら見守ってくれたような、そんな気がしています。

## ウクライナ大使館の前で 南川金一

港区にある東京都立中央図書館へ行ったので、近くにあるウクライナ大使館によって、ささやかながら寄付をしてきた。ウクライナ大使館は、裏通りの



展示写真の複写

ような狭い道の脇に建つ小さなマンション風の建物で、道路から建物入口までの数メートルの両側に、ロシアの爆撃による被害写真が展示されている。

爆撃におののく老婆、瓦礫の中から救出された乳児の写真など全紙大のものが十点ほど、リアルである。ただ、人通りの多い通りではないので、それを目にするのは、近くの住民か、大使館を訪ねてくる人だけなのが残念であった。

大使館前の道路には、万が一に備えて警官が警備している。近くにはロシアの大使館もあり、そちらは石や腐った卵を投げ込まれては困るので、警備は常時緊張していなければならないが、こちらにはそのような緊張感はないようであった。春に行った時は、勝手が分からずウロウロしている私に警官が声をかけてきた。「寄付したいのだが」というと玄関扉の左側を指差して、「郵便受けに入れて欲しいと書いてあるよ」と教えてくれた。大使館であるから、いきなり「コンチワ」と言って訪ねればよいというものではない。寄付は有難いが、その都度、職員が対応に出るわけにもいかないのがポストに入れて欲しい、というわけである。当方にとって、せいぜい消毒薬かインスタントラーメンに見合う程度の額であるから、そのほうがよい。

購読料と寄付をありがとうございます  
(敬称略) 8.10~10.9

赤坂京子 福島清 神原照子 中川路朋子 中村秀子  
塩川哲男 黒尾和久 片山篤子 泉恵子 伊藤牧子  
吉根由紀子 小池修生 吉田真由美・赤石としあき  
福原正和 小川早苗 相馬述之 中川充 阿保亘  
中川洋子 高嶋伸欣・道 小林千賀子 谷井利明  
永井智子 カンパも含めて78,000円は印刷と送料に使わせていただきます。郵便振替「銀河通信」02740-7-56535 年間2,000円です。web読者のカンパも歓迎します。

# 帰還困難区域の避難解除の妥当性

津田 孝

福島第一原発事故による一部帰還困難区域に対して6月に相次いで避難指示が解除された。12日に福島県の葛尾村、30日には原発立地自治体の大熊町の一部地域での指示解除が発表された。国と該当の自治体が協議して決定したのである。



写真・『福島民報』から引用

福島第一原発の立地自治体に人が住めるようになるのは初めてであるが、対象区域は除染を優先的に進めた特定復興再生拠点区域(復興拠点)と呼ばれる地域に限定されている。49人にすぎない。

制限解除の要件は線量が年間20ミリシーベルト以下、校庭や園庭は毎時3.8マイクロシーベルト(年間33.3ミリシーベルト)だが、これは空間線量だけである。土壌、河川、海洋など全ての生活空間が20ミリシーベルト以下かどうか、恐らく計測もされていないだろう。

実は、福島ではいまだに2011年3月の「原子力緊急事態宣言」が発令されたままだ。

日本の年間被曝許容量は、平常時一般人で1ミリシーベルト、それでも約2500人に一人の発ガンの可能性(危険)がある。それが20ミリシーベルトだと、一挙に125人に一人となり、子どもだと4倍 感受性が高いといわれるから、31人に一人が発ガンの可能性があることになる。

原子力施設や放射線利用施設等の「放射線管理区域」とは3ヶ月で1.3ミリシーベルトを超えるおそれのある区域だが、そこでは飲食や睡眠、排便などが禁止されている。つまり、20ミリシーベルトとは「放射線管理区域」を遥かに超える異常な数値なのだ。

人は山に登り、山菜やキノコを採り、川で泳ぎ、海で釣りをする。貯水をして水道水を作り、田畑に引いて稲や野菜を作る。沖合で漁船を操り、沿岸で昆布を採る。従って、生活のあらゆる場所が1ミリシーベルト以下に除染されている必要がある。キノコ採りや山菜取りなど当分は(多分ずっと)できない。

ところで、避難制限が解除されると、帰還しなければ自主避難者とされ、それまでの補償金などが出なくなる。政府・自治体の決定は住民の命と健康を非常な危険に晒すものである。一体こんな政治をいつまで続けるつもりなのだろうか。

『世界』2022年9月号「読者談話室」掲載の文章です。



絵・芳賀淳子さん  
十勝連峰をバック  
にした紅葉

# 男女平等教育に携わって 中川洋子

(前文)

16年前の退職間近に「空知の教育」に掲載する原稿を依頼されましたが、内容がふさわしくないというクレームがきました。教職員組合が推薦してくれていたの、なんとかこの雑誌に載せることが出来ました。この内容を読み返して、女性はもとよりマイノリティーの人たちも生きづらい世の中であることは、変わっていないと思いました。

現在の職場は、教職員が36名の大所帯、その半数以上が女性である。男性、女性を意識せずに生き生きと働き続ける女性教職員であふれている。

私が新卒だった頃は、女性が働き続けることが難しく、女性教職員の数が今よりずっと少ない時代であった。幸いにも上川管内に採用が決まり、赴任した学校は6学級の小規模校であったが、最初に迎えてくれたのが女性の教頭であった。あの頃は、女性が管理職になる事は珍しくこの教頭が校長になって転任するときには、新聞などのマスコミに大きく報道され一躍時の人となったものだ。しかし、同じ学校で夫が管理職になる引き換えに職を辞す女性教師がいたのである。一つの学校での女性ゆえの明暗に心が揺らいだ。その時の女性校長は現職で病に倒れ他界された。大きな期待を寄せられて赴任した僻地校で家族の支えもなく、たった一人で職務に専念した苦労は計り知れないものがあったのではなかろうか。

この頃は、女性だけが日曜出勤をして日直をしていた。朝のお茶出し、タオルの洗濯、給食の献立作り、養護教諭が配置されていなかったの、身体測定や検診の仕事まで任され右を左もわからないうちに雑務に追われていた。1年生の担任になった時、「5、6年の家庭科を男の先生は家庭科が苦手なので持ってください」と依頼された時、さすがにこれ以上仕事をしたら身が持たないと思い、女性だから持てというのは納得できなくて、「私は家庭科が一番苦手です」と、断わった。男性の新卒ならこんな仕事は決して回って来ないのである。女性への差別や偏見が根強く残っていた時代であった。

それから、数年後の国際女性年を契機に国連女性差別撤廃条約の採択がなされ、性別役割分業見直し男女平等社会を目指して世の中が動き出すのである。

空知管内に異動した私は、学校を挙げて、男女混合名簿や男女混合整列、徒競走、水泳大会、スキー大会等も男女混合で行って、学校の中から男女の区別をなくす取り組みの舵取り役になっていた。学校現場で行われている男女の区別は、考えていた以上に沢山あり、それが有形無形に男女差別につながっていたこと、また知らず知らずに染み込んだ慣習は、男女の生き方まで左右していることに気付かされたのである。

しかし、一方では重箱の隅をほじくる真似をするなどか、女性は飲み会にも参加しないくせにとか、訳の分からないことで反対を唱える同僚もいたが、いざ実行に移してみると、子どもたちはすんなりと受け入れた。男女が混じり合うことが自然なのだと、取り組んで実感した。(5pに続く)

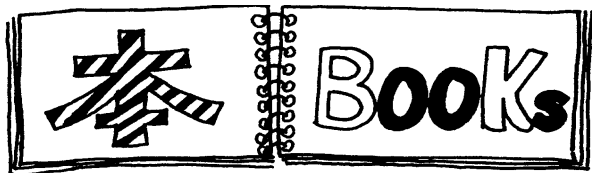
今までの慣習を変えることで、未来を生きる子どもたちが、男女の枠を超え一人の人間として自分らしく生きていけることを願って、職場の仲間たちと共に取り組んだことは、私の一生の宝物である。

ところが、この2、3年で男女平等教育実現のうねりが逆行し始めたのである。数十年前の教え子の中に、女子なのに自分を呼ぶ時、「ぼくは、」という子がいた。1年生とは思えない読解力があり、本が大好きな子だった。その子が音楽の時、歌の歌詞がぼくばかりだと抗議してきたのである。男中心の教材が多く女は男の後ろからついて行くような内容の教材を洗い出していた所だったので、渡りに船で彼女の要求を受け入れてぼくらのところをみんなに変えて歌った。彼女なりに女らしくしなければいけない事への理不尽さを感じていたのでしょう。その子が、今年、思わぬプレゼントをくれた。東京の劇団に入り演劇に打ち込んでいた教え子が北海道公演に行くから見にきて欲しいと言うプレゼントだった。米倉斉加年演出の『小林多喜二早春の賦』に女給役と他二役で出演しているのを観て熱いものが込み上げてきた。新聞にまで大きく掲載され、彼女の快挙を誇りに思ったが、ご両親は「女らしくなく育ってしまった」と、心から満足していないことがわかった。教育現場を一步出ると、まだ男女を区別する慣習が根強く残っている。

男女共同参画を推進するはずの行政側から耳を疑う発言も飛び交っている。特に結婚をしないで、子を産まなかった女性たちへのバッシングはひどいものだ。生殖能力がなくなった女性は、地球にとっては悪しき弊害とまでいう人達もいる。

私のことを言われているようで怒りを感じるが、後悔はしていない。自分らしく生きる為に一人で生きることを選択したからである。私の一生を終える時、自分で自分の生涯を評価したいと思っている。

教師は一夜にしてならず、沢山の教え子、同僚、保護者の皆様方に支えられ、教師の仕事を全うすることができ感謝の気持ちで一杯です。



### 全か無かを選ばない覚悟

外国人差別の現場

外国人差別の現場

安田浩一著・安田菜津紀著  
朝日新書 935 円

世の中に社会問題は数多くあって、どうにかしなければいけないよなと思うけれども、たいていほとんど何もできない。日々の暮らしで精一杯で、ニュースを追うことすらままならない。だからと言って、あきらめるわけにもいかない。よその国の戦争、他人の人権侵害、遠い地域の環境汚染であっても、人道的に許せないというだけではなく、必ず、自分や家族と繋がっているのだ。そんなとき、無力感にさいなまれてしまうのは、全か無かを選んでしまうからではないだろうか。全てに関わる

か、全部を知らないふりをするか。でも、待てよとそこで立ち止まりたい。一部の問題でも、少しでも関心を持ったり関わったりすることで、少しずつ社会の姿を変えていけるかもしれないじゃないか。

そういう思いを持って、社会問題についての本を読んでいる。ちゃんと背景から含めて問題を知るためには、ある程度の情報量が必要なので、勉強するには本が最適だと思う。

入管施設で亡くなったウイシュマさんのニュースは見ていたし、入管法政府案をめぐる抗議の声もネットを通じて知ってはいた。だが、本書を読み、自分の認識がいかに浅いものであったかを思い知らされた。

日本の外国人管理についての行政のあり方が、こんなにも人権侵害に満ちたものだったとは知らなかった。そして、知らずにいたことを恥ずかしいと思った。誰かを排除するシステムを持っている社会は、排除されない側にいる人にとっても、生きやすい社会であるはずがない。これはまさに自分の問題だということに、遅まきながら気づいた。そして、遅くたって、気づかないよりき気づいた方がいいに決まっている。

もう1つ、外国人技能実習生と呼ばれる、低賃金労働者の問題も提示されていた。こちらについても存在は知っていたけれども、これほど現場は無秩序であるとは思っていなかった。そして、国産の洋服を選んで買うことが、労働者の権利を守ることになると認識したいのだが、そうではないこともわかった。日本で縫製されている洋服も、低賃金外国人労働者からの搾取によって作られているのだったら、それらを選んで買っても、労働者のためにはならない。彼らの置かれている環境を改善してこそ、意味のあることになるのだ。そんなことも知らなかった。

結局、自分がいたたまれなくなることばかり書かれている本なのだった。けれど、これからは関連ニュースを読み飛ばすことはないだろう。と思っていたら、まさに2022年9月16日に入館施設でカメルーン人男性が亡くなったことに対して、国に賠償を命じる判決が出た（横松心平）



### 沖縄の問題を自分の問題として考えて

海をあげる

上間陽子著 筑摩書房  
1760円

沖縄で未成年の少女たちの支援・調査に携わり若年出産をした女性の調査を続ける上間陽子さんによるエッセー集です。

沖縄県で生まれた上間さんは、琉球大学教育学研究科の教授。那覇市の首里城近くに住んだことがあるが、現在は普天間基地の近くに住んでいます。一時東京で暮らしあと、沖縄に戻りました。

幼い娘との暮らしや、性暴力に苦しんだ少女や風俗業界で働く若者らとの対話、普天間から辺野

古への米軍基地移転問題等々、現在沖縄が抱えている実態を12の話に分け、瑞々しい文章で表現しています。コロナ禍、突然の休校で子どもたちとの別れの時間を奪われた悲しみを話す大学の教え子に「泣いている彼女にける言葉はひとつもなく、私たちがいま奪われているのはなんだろう」「沖縄のひとたちが、何度やめてと頼んでも、青い海に今日も土砂が入れられる。これが差別でなくてなんだろう」「差別をやめる責任は、差別される側ではなく差別する側のほうにある」と痛烈に批判します。

タイトルに込めたのは、青い海を守ることに絶望し、その思いを読者に「あげる」ことでした。

知らないじゃ通らない。子ども達に未来を見せるのは地域など関係なく大人たちの仕事だから。私たちがずっと沖縄に負担を強いていること。それを沖縄の人たちは受け容れざるを得ない。語れない状況になっていることが痛いほど伝わりました。観光ばかりが目目されるけれど、もっと沖縄の抱えている問題を自分ごととして支援しなければと思いました。(みな子)



## アイヌの人たちの声対等に 発信される社会をめざして

「新しいアイヌ学」のすすめ  
知里幸恵の夢をもとめて

小野有五著 藤原書店 3,630円

「はじめに」で、「アイヌもアイヌでない者も、その力を信じ、お互いが心を開いて語りあいたい。アイヌにとっても、そうでない者にとっても、よりよい、平等な社会をつくっていききたい。それは知里幸恵さんが、十九歳で天に召されるまで、つねに彼女の同胞(ウタリ)のために祈っていたことだからです」と小野有五さんは自分の意思を伝えています。上から目線でアイヌの歴史を綴るのではなく、アイヌの人々と共に闘い、平等に生きる社会をつくりたいという思いが貫かれています。

「新しいアイヌ学」のすすめ、と題された「おわりに」の部分には、この本が書かれたいきさつが書かれています。2021年の春、突然、宇梶静江さんから電話が鳴ります。私はまだ読んでいませんが『大地よ!』という自伝の著者でした。3.11の東北の大地震が起きたときに書かれた同じ題名の詩を小野有五さんは読み感動するのです。本文に紹介された「大地よ」の詩です。

大地よ 重たかったか 痛かったか  
あなたについて もっと深く気づいて 敬って  
その重さや 痛みを  
知る術を 持つべきであった (略)  
その痛みを 今私たち 残された多くの民が しっかりと気づき 畏敬の念をもって 手をあわすと記しました。この言葉に私はアイヌの生き方にハッとさせられました。

静江さんから「アイヌ学をはじめたい、協力してほしい」と小野さんは言われるのです。「アイヌ力」ということばも本文にはたくさん出て来ます。この言葉も静江さんから教えられたものでした。

小野さんは書きます。「これまで、和人の多くは『アイヌ』を研究対象として扱ってきたのではないか。そう

ではなく、和人も自分自身を語り、その経験を共有すべきだ」と述べています。

知里幸恵のアイヌ神話集の序文を紹介しています。「いつかは、二人三人でも強いものが出て来たら、進みゆく世と歩をならべる日も、やがては来ませう」。少しでも手を貸すことをしようと思った小野さんに共感の輪が広がりました。私も小さな小さなそんなひとりでした。作家の津島佑子さんは「幸恵さんが何とか伝えようとしたのはアイヌ語の声であり響きであった」と記しました。この言葉にも共感しました。ノーベル文学賞を受賞されたル・クレジオさんとの出会いも、感動的。

第3章のアイヌエコツアーは小野さんが力を入れた取り組みです。アイヌが主体となり、自然や文化をガイドすることは知床から始まり、札幌など各地に広がりました。アイヌエコツアーには共に生きる社会を作りたいとの思いが貫かれています。小川隆吉さんの語りを聴きとりしたところが私は特に好きです。「おわりに」で出版を目前にして亡くなったことを知り、涙しました。隆吉さんの語りが聞こえるようでした。私が北海道民医連の病院に在職中に隆吉さんが入院していたことがあり、身近に感じていました。

第5章で「最終氷期に最も先端的な『細石刃文化』をもっていたこの人間集団が、気候変化に対応して世界に先駆けて土器を創り出し、また『南方系縄文集団』や『和人』、『オホーツク人』との接触によって、次々に新たな文化を選択、吸収し、自らを変えて発展させていった歴史は、きわめてダイナミックなものである」の見解に驚きと敬意を覚えました。

私が会ったアイヌの人は多くはありませんが、知里幸恵記念館を作ろうと奮闘された横山むつみさんも故人になりました。中本ムツ子さんは取材させていただいたご縁で長く銀河通信の読者でした。

アイヌの未来を模索し続けた方たちにこの本は最大の賛辞を贈っています。(みな子)



## あなたも私もひとりではないよ

夜に星を放つ

窪美澄著 文藝春秋 1540円

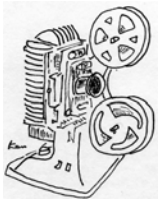
題名と本の装丁の愛らしさに思わず引き込まれました。家族や恋人など大事な人を失った心の揺らぎや輝きを鮮やかに描写した短編5編が収められています。

「銀紙色のアンタレス」は海の近くに住むおばあちゃんの家で、16歳の高校生が密かに恋をするのは年上の女性との話。「アンタレスって何?」と星の観測が大好きな夫に聞くと即座に「さそり座の心臓部に輝く赤い星だよ」と答えてくれました。

最後の「星の隋(まにま)に」は父の再婚した義母になじめない小学生の想君が知り合った女性は戦争体験者でした。東京大空襲の体験を絵に描き「『炎の熱と熱さで星座もほどけてしまったんじゃないから。こんなふうに』 真っ黒な夜空には所々

に星が見えた。その線はまるで溶けているように、だらりとゆるみ、白い線が縦に走っていた」は、著者が体験者から聞き取った言葉でした。

どの作品にも、死別や離別の悲しさや寂しさが隠れているのです。人生には悲しいことや辛いことも多いけれど、夜空を眺めて星に祈ろうと前向きになれた一冊でした。直木賞受賞作です。(みな子)



### 森で出会ったのは8歳のママ だった

秘密の森の、その向こう

セリーヌ・シアマ監督・脚本



ネリーとマリオンを演じた、映画初出演のジョセフィーヌ&ガブリエル・サンス姉妹の見せる、演技とは違う、自然さと豊かな感性に驚きました。

不滅の名作と言われる「燃ゆる女の肖像」のシアマ監督の才能が存分に発揮された作品です。

ネリーの祖母が亡くなり、その死に強い喪失感を抱く母の気持ち、ネリーが祖母に最後の別れを言えなかった後悔によって、時空を超えるという奇跡を与えられた物語です。

8歳の少女ネリーは大好きな祖母を亡くし両親と共に、祖母が住んでいた森の中の家を片付けるために訪れます。しかし、この家で子どもの頃を過ごした母マリオンは、残されていた物を目にするたび、亡くなった母(ネリーの祖母)を思い出し、いたたまれない気持ちになり、ネリーに黙って家を出て行ってしまいます。

ネリーは森を歩いていると自分と同年の少女と出会います。少女はマリオン。8歳のママでした。ひよんなことから少女の家に行くと、そこは“おばあちゃんの家”でした。ネリーはマリオンと一緒にすごし「娘」であることを教えることで、生きる希望を与えます。母マリオンの9歳の誕生日を祝い、祖母に最後の「さよなら」を伝えることができたのです。娘、母、祖母をつなぐ物語にすっかり魅せられました。

私はふと祖父を思い出しました。ひとり暮らしをしていた旭川にいた頃、祖父が夢枕に立ったのです。「みな子、ひとりで大丈夫か?」と。祖父は早朝に亡くなったのです。祖父は私が小さな頃、体が弱かったことをずっと心配してくれていたのだと思いました。枕元に立っていたのは、まだ若き日の祖父でした。秘密の森は、祖父母の住む日高の森のように思えました。私も8歳の時に森で遊んでいて熱中症になり、祖母が私の両親に「ミナコキトクスグキタレ」と電報を打ち、祖父は愛馬に乗って医師の往診を頼みに行ったと聞きました。私が目を開けた時、両親はそばにいました。その記憶は鮮明で、生きる力になっているのだなあと思います。シアマ監督は「ジブリの宮崎駿や細田守ならどう描くだろう?」とたくさんの影響を受けたと語っています。森が美しく心が安らぎました。(みな子)



### 友情の尊さを繊細に描く

サバカン SABAKAN

金沢知樹監督・脚本

物語は売れない作家の久田孝明(草なぎ剛)の子どもの頃の回想で展開します。

サバ缶で寿司を握ってくれた同級生の竹本健次を思い出す。久田の脳裏に、長崎の小さな島々に囲まれた、静かな海の漁港と故郷の町が浮かびます。監督の故郷が舞台で、竹ちゃんと過ごしたかけがえのない夏の思い出が語られます。スタンドバイミーを彷彿とさせるノスタルジックな作品。いつの時代も、誰にとっても「少年・少女の日の冒険」は、忘れられないですね。

竹本は少し変わっていて、同級生から避けられている少年でした。貧しいためにノートを買うことが出来ず、いつも机に魚の絵を描いています。

ある日、竹ちゃんは「ブーメラン島にイルカを見にいこう」と久田を誘い海に出かけます。ところがヤンキーに絡まれたり、海で溺れそうになったりと波乱が待ち受けていました。竹ちゃんは久田を海から山々、町まで見渡せる絶景の場所に連れて行くのです。ふたりのかけがえのない思い出になりました。キラキラきらめく海。思わず息を飲む絶景。風景の撮り方が素敵です。

ふたりがイルカを探す冒険から帰り、いつまでも「じゃあね、またね～」と繰り返す場面にジーンとしました。ふたりの永遠の友情を感じました。

周りの大人たち、久田の両親、竹ちゃんの母、ミカン農家のおじさんたちの温かさも良かった!

本来はラジオ番組として作られましたが、諸事情で中止になり映画になりました。草なぎ剛のナレーションは久田の回想を語るのではなく、朗読劇による風景や空気感の膨らみを更に感じさせ、ラジオドラマでの経験が生かされていると感じさせて秀逸。(みな子)



### 死者への想いを背負って生きる人々を笑顔にするもの

川っぺりムコリッタ

荻上直子監督・原作・脚本

孤独な青年がアパートの住人との交流を通して社会との接点を見つけていく姿を描く物語。穏やかな風景を持つ一方で氾濫すれば周囲を押し流す「川っぺり」に、仏教用語の「ムコリッタ」を組み合わせたタイトルです。

無一文で何か訳ありな山田(松山ケンイチ)は塩辛工場に職を得て、社長沢田(緒形直人)の紹介で「ハイツムコリッタ」という長屋に入居します。大家は夫を亡くし、ひとりで娘を育てる南(満島ひかり)です。

隣に住む島田(ムロツヨシ)がいきなり「風呂を貸して」と現れます。彼は庭でさまざまな野菜を栽培

して山田に渡し、そのまま勝手に山田の部屋の風呂を使い始めます。

当初は島田の凶々しさに戸惑っていた山田だが、島田が「食事ってさ、ひとりで食べるより誰かと食べた方が美味しいよ」の言葉をかけ、食事を共にするようになりまます。荻上監督作品の「かもめ食堂」のテーマとも重なりますね。私は心に病があっても安心して自分を取り戻せる居場所が理念の調布にある「クッキングハウス」が真っ先に思い浮かびました。一緒にご飯を食べながら気持ちを語り合い、泣いたり笑ったり歌ったり、メンタルヘルスを学んだりして、心優しい福祉文化の発信地になっています。

長屋には幼い息子と喪服で墓石を売り歩く溝口(吉岡秀隆)もいます。どこか少しずつ世間とずれている人々ばかりが住んでいるのです。ムコリッタ(牟呼栗多)とは仏教における時間の単位のことだそうです。

貧しいけれど、優しくおおらかな隣人たちに山田も心を開いていくのです。幼いころに捨てられた山田は、市役所から孤独死した父親の遺骨を引き取りにきてほしいと連絡がきます。「何故、自分が？」と納得できない中、島田は「自分の父親じゃないか」と慰めます。南も最愛の夫の死に耐えているのです。それぞれに死の重みを背負い、時には生きる辛さを感じて日々を過ごす人々が描かれます。それでも「小さな幸せを見つけようよ」と再認識させてくれました。(みな子)

## 旭岳・姿見の池で紅葉を楽しみました



旭川まで高速バスで行き、友人宅に泊めていただき9月13日旭岳の姿見の池周辺を歩きました。

チングルマやナナカマドが紅葉。

シラタマノキやコケモモ(下の写真)の群落が愛らしい。エゾリンドウもたくさん咲き、日本一早い紅葉を楽しみました。夫婦沼の深い青と周囲を囲む紅葉のコントラストが素晴らしい。

旭岳の山容(上の写真)は中々全部は見せてくれませんが下山中の12時にやっと見ることが



できました。噴煙が年々激しくワイルドになっているように思います。ウラジロナナカマドの色付きが始まり、夏に可憐な花を咲かせてくれたチングルマの葉が真っ赤になって再び我々の目を楽しませてくれます。

遠出するのは久しぶり。友人とゆっくりと語りあい、とてもリフレッシュできました。「大雪と石狩の自然を守る会」の寺島代表に旭岳までの運転と山のガイドもしてもらい嬉しかったです。(写真と文 みな子)

231号にたくさんの投稿ありがとうございました。紙面の都合で購読料を振り込んでいただいた方のお名前を3面に掲載しています。

## 「ミャンマーを知る市民講座」にご参加ください

昨年2月1日にミャンマーで国軍がクーデターを起こしてから1年半が経ちました。これに対し、ミャンマー国内はもちろんのこと、世界各地でさまざまな運動が展開されてきました。

北海道も例外ではありません。クーデター後、在北海道のミャンマーの人々が結集して「ミャンマーユースアソシエーション北海道(MYAH)」が設立されました。札幌を拠点にデモや集会を通してミャンマーの現状を伝えたり、国軍ではなく国民統一政府(NUG)を正式なミャンマー政府として認めるよう日本政府に訴えたりしながら、現地に送る支援金を集めています。また、運動のサポートを申し出た人々によって「北海道でミャンマー人を支える会」も生まれ、デモや街頭での募金活動など、多くのイベントを協働して行ってきました。

このようなミャンマーの人々の抵抗やこれに連帯する各地での活動内容などを共有するため、私が所属している北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院では、今年8月から「ミャンマーを知る市民講座 民主主義のための連帯」を開講しています。10月以降の日程は次の通りです。

\* 第3回10月27日(木)

題目: NUGの活動と少数民族の状況/クーデター後の海外に暮らすミャンマー人の活動

講師: ソーバラティン(NUG 駐日代表・在日カレン民族連盟幹部)/キンゼツヤミン(国際ミャンマー学者・専門家協会理事)

\* 第4回11月16日(水)

題目: 日本各地のミャンマー民主化運動

講師: トウン(Myanmar Youth Association Hokkaido 代表)/キンヤダナソー(ShizuYouth for Myanmar 代表)/トウヤソウ(在沖縄ミャンマー人会事務局長)

\* 第5回12月4日(日)

題目: ミャンマーの抵抗運動への日本人の連帯

講師: 石川航(日本ミャンマーMIRAI 創造会日本側代表)/藤田哲朗(ミャンマーの今を伝える会創設者)

いずれも18時半開始で参加費は無料です。オンライン配信ですが、第3回のみ、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院メディア棟407会議室にて対面での受講もできます。参加希望の方は、氏名、住所、電話番号、所属(あれば)と「銀河通信読者」の一言を添えて、ceams5143@gmail.comまでメールをお送りください。各回の直前にZoomのURLをお送りします。

(紙面の都合で下郷さんの想いを載せきれませんでした)

気に入っている言葉があります。それは「サンダーピャーデー」です。「サンダー」は希望、「ピャーデー」は見せるという意味ですが、一緒に使うと「デモをする」という意味になるそうです。

寿郎社編集者・北大学術研究員

下郷沙季(しもごうさき)